

佐藤くんのことを考えている。佐藤くんは不思議な人だから目で追いかけてしまう。何を考えているのかわからないから話してみたくなくなってしまった。でも、佐藤くんからしたら私なんて一般人Aでしかないんだろうな。

佐藤くんは「佐藤英明」という名前で、仲のいい一人の人からは「エイメイ」と呼ばれている。愛されてるなあ、と思う。ちなみに本当の読み方は「ヒデアキ」だ。

佐藤くんが笑っているところを見たことがない、ような気がする。休み時間はだいたい彼のことを観察しているので、これは間違いない。佐藤くんはいつも友達のことを見つめていて、領いたり時々返事をしたりする。表情筋が硬いのかな？と思ったけど、あまり笑わない人のほうがほっぺがもちもちらしい。

佐藤くんはいつもおにぎりを食べる。具はなにが好きなのか、と考えているうちに彼はそれを食べ終えてしまう。早食いなのか。私もお弁当を十分くらいで食べ終えてしまうから、あまり人のことは言えないけど。

佐藤くんは。

「ねえ」

「え」

佐藤くんが、私の前に立っている。どんな顔をしているのか、見えない。恐る恐る顔を上げる。目が合う。刺される。

「橋本さんは、なんで僕のこと見てるの」

なぜ？

なぜかはわからない。ただ、面白いというか、不思議というか、気になったから。だから見てる。いや、見てるって言うよりは観察してる。

走って、走って、走った。信号が赤になったので、止まった。とつくに自分の家は通り過ぎていくし、なんなら中学校も過ぎてしまった。高校からどこまで走って来たんだろう。こんな走りにくいローファーで、しかも制服で。

なぜって。

佐藤くんの表情が思い出せない。周りに人がいなくてよかった。たまたま教室に二人で残っていた、と言うのは嘘で佐藤くんが残っていたから私も課題をやっていたんだけど、もし人前であんなこと聞かれていたら、高校生活が終わっていたかもしれない。しかしいずれにしても、本人に気付かれた時点で観察は強制終了だ。

河川敷。

私は原っぱに座り込んで、膝に顔を埋めた。なんで悲しいんだろう。別に、観察してただけだし、というよりはさせてもらってただけだし。興味があつたからであつて、好きとかそういうのではないし。どんな人間なのか、知りたくなつてしまつたというかなぜ。

そんなの、私がいちばん知りたい。

「なんでこんなとこいるの」

「うわっ」

「うわっ……って」

佐藤くんが、いる。思わず化け物に会つたようなりアクシオンをしてしまい、彼の顔が呆れを示す。まあ、突然逃げた上にこんなところで放心していたら、やばいなつて感想しか出てこないか、普通。

「あの、怒らせたのならごめんなさい」

咄嗟に謝つて、さらに逃げる準備をする。彼はブレザーの裾を掴んで引き留めた。引き留められるとは思わなくて、動揺でコケてしまう。ブレザーが草だらけになつた。情けなさ過ぎる。神様、これが天罰というやつでしょうか。

「ふ、ははっ」

佐藤くんは口元を手で押さえて、その場に縮こまつた。

微かに震えている。え、まさかもしかして。

「笑つ、た」

「へ？ 笑うって、流石に」

佐藤くんの笑顔は、思つていたよりもずっと柔らかくて、暖かかった。私はそれに釘付けになつてしまつた。

「橋本さんって結構どんくさいね」

「ど、どん……！」

言い返そうとしたが、実際どんくさいので何も言えなかつた。実際、走り疲れていたので最終的にどこかで転んでいただろうし。その「どこか」がここになつてしまつただけだ。

「僕のことずつと見てるからヘンな人だと思つてたけど……想像以上だった」

改めて「ヘンだね」と目を細めて言われる。ヘンって、それを言うなら佐藤くんもじゃないか、と言えたらよかつたが、私の思考回路はショート寸前であり、佐藤くんとの会話でいっぱいだった。なんて返そうか迷つているうちに、新しい会話が更新される。

「橋本さんが、僕のことどう思つてるかはわかんないけど」

佐藤くんは空を見上げた。すつかり夕日が地平線に沈もうとしていた。水面が夕焼け色にきらめいている。そよ風が原っぱと、私たちを優しく撫でた。

「僕はそんなに、面白くないよ」

期待を裏切ったらごめん、と付け加えて立ち上がった。

別に、彼が面白くなかったとしても、期待外れだったとしても、そんなこと言わないし、そもそも思いもしない。

そんな佐藤くんのすべてを含めて、私は。

「……あ」

気付きたくない。認めたくない。

終わる。

世界が音を立てて崩れていくような気がした。ガラスの破片が足元に散らばって、肌を切っていく。痛い。

佐藤くんは「家こっちだから」と言っただけで、夕日の方向へ向かった。私は。私が行く先は、夜だった。

わからない。知りたくない。これ以上は踏み外してしまふ気がする。いや、踏み外すに違いない。私は布団にくるまって、蛹みたいになって、震えた。考え込んだ。これはなに。

これは。

答えを知っているのに、知らないふりをする。そのほうが、都合がいいから。傷つかないで済むから。痛いことと、さみしいことは嫌だ。

佐藤くんのこととはわからない。わからないままでいい。わかりたくない。